（様式４）

教育研究グループ「研究結果」報告書

報告日 平成３１年４月２４日

グループ名	貝取小学校研究推進チーム	フリガナ 代表者氏名	サトウ　ヨシノリ 佐藤　美徳
学校名 （代表者）	多摩市立貝取小学校	電話番号	042-376-0234
研究テーマ	「自ら学び、自分の考えを深め、発信できる児童の育成」 ―対話のある授業を通して―		
研究期間	平成３０年４月１日　から　平成３１年３月３１日　まで		
研究結果 の概要 ※詳細は別 紙により 報告	平成２９年３月、新学習指導要領が公示された。子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成することや、知識の理解の質をさらに高め、確かな学力を育成することが基本的な考え方として示されている。 本校では昨年度から、研究主題を「自ら学び、自分の考えを深め、発信できる児童の育成」とし、３年間をスパンとして児童の学力向上に向けた研究を進めている。１年目となる昨年度は、副主題を「各教科等の特性を生かした主体的対話的で深い学びの実現」に設定し、各自が研究教科を選択することにした。各教科等の基礎・基本の習得を図るとともに、研究主題に迫るためにどの教科にも共通する方法を見いだしていく期間と位置づけ、研究を行った。 さまざまな教科で研究をしたことでどの教科にも通じる共通の工夫について検証できた一方で、教科の特性に応じた工夫の検証や学年ごとのつながりや系統性、深まりという点で課題が見られた。また、対話的な学習を進めるための指導や手だてについて研究を行うことが本校の児童の学力向上に向け、必要ではないかと共通認識した。 そこで、２年目となる平成３０年度は、副主題を「対話のある授業を通して」とし、分科会ごとに教科を決め、研究を進めることとした。 その成果として、低学年（国語科）では、「くじらぐも」を取り上げ、大きく工夫されたくじらぐもの掲示物から児童一人一人が場面のイメージをふくらませ、それをペア学習での話し合いへと効果的につなげることができた。中学年（理科）では、他者との対話を通して思考し、児童が自らの「知」を再構築することについて、「ものの体積と重さ」との関係について、科学的事象との出会いが充分に工夫され、大切にされた中で、丁寧に「学びの掘り起こし」がなされた。高学年（外国語）では、「伝える必要性をいかに活動の中に創出するか」ということが、ゲーム化された「商店街での買い物」という言語活動の中で追究された。いずれも、これからの学習観を根幹から支える理念へとつながるものとなった。		
その他 特記事項	○研究方法の工夫 研究教科と OJT のもち方を以下のように設定して実践した。 ・研究　…　どの教科にも共通する理念やキーワードを見出す。 （研究授業の教科については、各分科会で選択） ・OJT　…　各成員の専門性を伸ばすことを主眼として行う。 （教科チームを構成し、成員同士で学び合う）		

平成３０年度　貝取小学校研究推進チーム研究報告

研　究　主　題

「自ら学び、自分の考えを深め、発信できる児童の育成」

～対話のある授業を通して～

多摩市立貝取小学校研究推進チーム

Ⅰ　研究の概要

１　研究主題

自ら学び、自分の考えを深め、発信できる児童の育成

－対話のある授業を通して－

２　研究主題設定の理由

平成２９年３月、新学習指導要領が公示された。子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成することや、知識の理解の質をさらに高め、確かな学力を育成することが基本的な考え方として示されている。

本校では昨年度から、研究主題を「自ら学び、自分の考えを深め、発信できる児童の育成」とし、３年間をスパンとして児童の学力向上に向けた研究を進めている。１年目となる昨年度は、副主題を「各教科等の特性を生かした主体的対話的で深い学びの実現」に設定し、各自が研究教科を選択することにした。各教科等の基礎・基本の習得を図るとともに、研究主題に迫るためにどの教科にも共通する方法を見いだしていく期間と位置づけ、研究を行った。さまざまな教科で研究をしたことでどの教科にも通じる共通の工夫について検証できた一方で、教科の特性に応じた工夫の検証や学年ごとのつながりや系統性、深まりという点で課題が見られた。また、対話的な学習を進めるための指導や手だてについて研究を行うことが本校の児童の学力向上に向け、必要ではないかと共通認識した。そこで、２年目となる今年度は、副主題を「対話のある授業を通して」とし、分科会ごとに教科を決め、研究を進めることとした。

３　研究内容

（１）研究のねらい

・各教科の基礎的・基本的な内容の確実な習得を図ることで、考える力・表現する力を育てていく。

・どの教科でも生かせる共通の手だてを見いだす。

（２）各分科会での授業実践

・低学年分科会、中学年分科会、高学年分科会の３分科会において、各ブロック１回ずつ、年間３回の研究授業を行う。また OJT では、各教員の専門性を伸ばすために、教科ごとのグループを作り、グループで学び合う

（３）目指す児童像に迫るための工夫

・各分科会で児童の実態を検証し、具体的な手だてを考え、検証する。学習活動の工夫を具体化し、授業の中で学習活動の工夫の有効性について検証する。

４　研究の方法

（１）３分科会（低学年・中学年・高学年）が，研究主題をもとに，それぞれの実態に合った各分科会の主題を設定し，相互に連携しながら研究を進める。

（２）各分科会で研究教科を選択し、研究主題に迫るための手だてを探る。

（３）検証授業後に協議を行い，成果と課題についてまとめ日常の授業に活かす。

（４）３分科会で行った検証授業の成果と課題をもとに，本年度の研究の成果と課題についてまとめ，次年度に生かしていく。

5　研究構想

[学校教育目標]	[教育の今日的課題]	[保護者・地域の願い]	[児童の実態]
○考える子 ○思いやりのある子 ○努力する子 ○体力のある子	・知識及び技能の習得 ・思考力、判断力、表現力 ・社会性の向上 ・特別支援教育の充実	・落ち着いて学べる学校 ・基礎学力をつける ・学ぶ楽しさを味わわせる ・分かりやすい授業	・明るく素直で、興味・関心をもったことに集中して取り組める児童が多い。 ・考える力、表現する力に課題が見られる。 ・基礎的・基本的な内容の習得に課題が見られる。 ・自己肯定感が低い。 ・ユニバーサルデザインの活用が有効だと考えられる児童が多い。

◎基礎的・基本的な内容の確実な習得
◎各教科の基礎・基本の見直し
◎問題解決的な学習
◎授業の中に深く考える場面を設定（主体的対話的で深い学び）

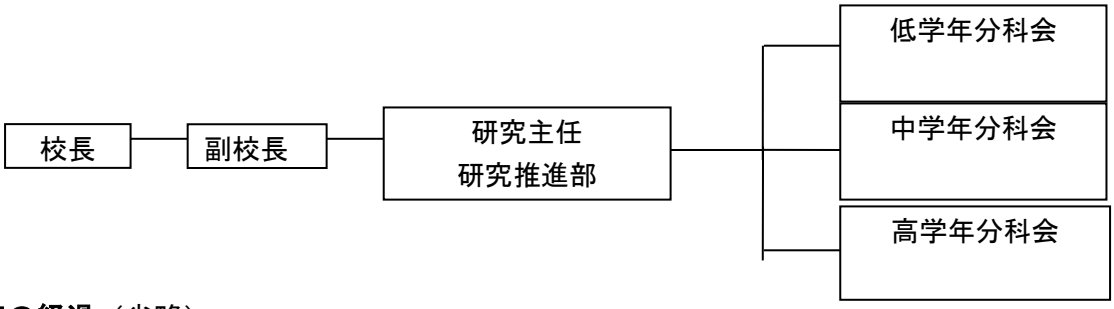
[研究主題]
自ら学び、自分の考えを深め、
発信できる児童の育成

◎校内研とOJTの一体化
◎基礎的・基本的な内容の習熟
◎地域・保護者との連携

分科会主題		
[低学年] 聴き合い、学び合う児童の育成	**[中学年]** 事物・現象との対話を通して、かかわり合いながら考えを深められる児童の育成	**[高学年]** すすんでかかわり、自分の気持ちや考えなどを伝え合うことができる児童の育成
（目指す児童像） ・友達の話に関心をもって聴く子 ・自分の考えをもち、友達に伝えることができる子	（目指す児童像） ・事物・事象を正しく受け止め、考えをもつことができる子 ・事物の考えを表現したり、友達の考えを受けとめたりできる子	（目指す児童像） ・課題解決を図るために、すすんで人とかかわろうとする子 ・自分の考えをもつことができる子 ・自分の気持ちを他者に伝えることができる子 ・相手の話をよく聞き、理解しようとする子

6　研究の組織　下図の３分科会とする。講師を招聘し，指導を受ける。

今年度の講師　東京都多摩教育事務所　指導主事　阿部　梢先生
帝京大学大学院　小山　恵美子先生
和光大学現代人間学部心理教育学科教授　中田　朝夫先生



7　研究の経過（省略）

Ⅱ　分科会ごとの成果と課題

１、低学年分科会での実践

（１）授業研究の概要

①学年と教科：第１学年　国語科

②単元名：こえにだしてよもう　教材名「　くじらぐも　」　（光村図書　１年）

③　単元の目標

◎登場人物の様子や気持ちを具体的に想像したり、声に出して読んだりして、物語を楽しむ。

〇場面の様子や登場人物の行動や気持ちについて伝え合い、想像を広げながら読む。

◎想像したことや考えたことが伝わるように、言葉を付け足したり、読み方を工夫したりして音読する。

④　本時の指導（全１０時間中の７時間目）

ア、本時の目標

・　空を旅するくものくじらと子供たちの様子や気持ちを楽しく思い浮かべ、ペアでやりとりをすることにより、想像を広げて読むことができる。

イ、本時の展開（省略）

⑤　成果

ア、学習形態の工夫（ペア学習）について

・　ペアは誰でもいいわけではない。ペアの組み合わせを考えてペア学習をさせたことで、相手の考えを聴き、自分の考えを伝えることができていた。組み合わせが大切。

・　一人では考えがもてなかった児童が自分の考えをもてたり、考えを広げたりすることができた。

・　「くじらぐも」の学習の中でもペア学習は効果的で、児童が考えを広げることにつながっていた。

・　話し合うことで、自分の考えが広がることを実感している。

イ、教室掲示の工夫について

・　実物、絵、表、まとめたものなどの視覚的なものがあると、自分の考えを深める手助けになる。

＜話型・ハンドサイン＞

・　話型を示すことによって、子供たちは話し方が分かってきた。自分の思いや考えを聞き手に分かりやすく伝えられるようになってきた。

・　教師がハンドサインを見ることで、同じ意見や違う意見を判断でき、児童の考えを膨らませたり深めたりさせながら授業を組み立てることができた。

・　特に、「同じです」は友達を認めることにもなり、安心して学べる学級づくりにもつながった

・　「話型」によって、話の聴き方を身に付け、友達の考えを自分の考えと比べながら聴くことができるようになってきた。

＜1 時間ごとの内容を振り返る＞

・　自分たちが学んできたことを振り返り考えられるため、理解につながった。

・　前時までの学習が分かるので、次の時間の学びにつながる。

ウ、「具体的に想像し」への工夫について

・　挿絵を大きくしてペープサートを使って考えさせたことで、物語の世界に入り込みやすかった。

・　見たり経験したりしたことのないことも挿絵によってイメージがもて、読み取りの手助けになった。

・　登場人物の吹き出しを書かせることによって、登場人物に同化して考えることができた。

⑥　課題と今後について

ア、個で考えるかペアで考えさせるかの場面選択は、教師がきちんと見極め、授業を構成する必要がある。

イ、ペアで話し合いをさせるための発問を吟味する必要がある。発問によって、ペア学習の質が変わる。

ウ、ハンドサインは、6 年間共通にしたい。どの学年、どの教科にも使えるものにしたい。

エ、学習内容の振り返りをすべての単元で行うのは難しいが、可能な範囲で取り組んでいきたい。

オ、登場人物に入り込むのか、自分に置き換えるのか。どちらがより迫れるのか考えていく必要がある。

「おおきなかぶ」　おじいさん・おばあさん…、登場人物になりきる。

「くじらぐも」　村の方へ、山の方へ…、このくじらぐもに乗った子供たちになりきる。

「くじらぐも」　天までとどけー，二，三　子供たちが話に入り込むことで音読につながる。

２、中学年分科会での実践

（１）授業研究の概要

①学年と教科：第３学年　理科

②単元名：ものの重さをしらべよう

③　単元の目標

◎　物の形や体積に着目して、重さを比較しながら、物の性質を調べる活動を通して、それらについての理解を図り、観察、実験などに関する技能を身に付けるとともに、主に差異点や共通点を基に、問題を見いだす力や主体的に問題を解決しようとする態度を身に付ける。

ア、次のことを理解するとともに、観察、実験などに関する技能を身に付ける。

・物は、形が変わっても重さは変わらないことがわかる。

・物は、体積が同じでも重さが違うことがあることがわかる。

イ、物の形や体積と重さとの関係について追究する中で、差異点や共通点を基に、物の性質についての問題を見いだし、表現すること。

④　本時の指導（全８時間中の５時間目）

ア、本時の目標

・物の体積を同じにしたときの重さを比較して、それらについて予想をもち、表現している。

イ、本時の展開（省略）

⑤　成果

ア、視覚に訴える課題提示が、課題を正しく把握させるために有効であった。

イ、既習事項や生活経験を想起させることで、児童が自分の考えをもつことができた。

ウ、交流の場を設けることで、友達と比較しながら共通点や差異点を見出すことができ、児童は、より主体的に課題解決しようとしていた。

エ、言葉や図で表現させ発表させたことが、自分の考えを表現できない児童にとって、自分の考えをもつきっかけとなった。

オ、グループでの意見交換の場を意図的に設定したことで、友達の考えを受けとめたり、自分の考えを再構築したりして、考えをより深めることができた。

カ、生活経験を想起させることは、根拠をもって予想を立てることに有効であった。

⑥　課題

ア、導入時の提示物が、見方（重さ、かさ、素材）において素材に限定されてしまった。かさと素材も含めた課題提示があったうえで、素材に焦点化されていくような展開が必要であった。

イ、グループでの意見交換の場が、表現が得意な児童とそうでない児童と差がでてしまう。役割を立てたり、話し合いの仕方を示したりする必要がある。

３、高学年分科会での実践

（１）授業研究の概要

①学年と教科：第５学年　外国語活動

②単元名：「What do you want？」

③　単元の目標

◎　欲しいものを尋ねたり答えたりする表現ができるようにする。また、活字体の大文字や小文字とその読み方（名称）に慣れ親しむ。

ア、積極的にアルファベットの大文字を読んだり、欲しいものを尋ねたり答えたりしようとする。

イ、アルファベットの文字とその読み方とを一致させ、欲しいものを尋ねたり答えたりできるようにする。

ウ、身の回りにアルファベットの大文字や小文字で表現されているものや、英語と日本語の音声面に関する類似点・相違点に気付く。

④　本時の指導（全６時間中の６時間目）

ア、本時の目標

・欲しいものを尋ねたり、答えたりする表現を使い、伝え合うことができるようにする。

・積極的に友達が欲しいものを尋ねたり、答えたりしようとする。

イ、本時の展開（省略）

⑤　成果

ア、商店街を舞台として設定したこと、自分の興味があるお店を開店させるために準備を行うようにしたことなどにより、児童は進んで学習に取り組むことができた。

イ、教師が尋ねるのではなく、児童同士が尋ね合う場を設定することで、児童同士のやりとりが活発になり、英語で表現を行う時間を増やすことができた。

ウ、１時間ごとの授業のめあてを明確に示すことにより、児童が見通しをもって学習に取り組むことができた。

エ、児童の日常の生活に馴染みのある言葉を取り上げることで、児童の表現することへの抵抗感を減らし、活動に取り組ませることができた。

オ、学習で身に付けた単語や話型を授業の前半に繰り返し練習させることによって、Activity の活動場面でも児童が自信をもってやりとりをすることできた。

カ、いろいろなお店買い物をするという設定にしたことにより、多数の人とのかかわりもたせることができ、英語表現に親しむことができた。

⑥　課題

ア、主体的・対話的で深い学びの実現のためには、英語であいさつをさせる意味や雰囲気作りを行うことの必要性など、活動の意味を教師が深く考えて授業を作っていくことが重要である。安易に、ハローソングやキーワードゲームを盛り込んだりすることのないようにする。

イ、授業内でのコミュニケーションルールを子供達から出させることにより、主体性がより育成される。活動の意欲が削がれるルールを教師側から提示することはしてはいけない。

ウ、生涯にわたって外国語によるコミュニケーションを通して社会・世界と関わり、学んだことを生かそうとすることを意識させるように指導することが必要である。

エ、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等を明確に設定したり理解したりして見通しをもって粘り強く取り組ませるようにしていくことを今後も継続していく。

オ、まとめの過程で自らの学習やコミュニケーションを振り返り、次の学習につなげさせていくことが必要である。